

「月へ行きたいんだ。おれ、リスからヒッチハイクしてきたんだよ」

「おやおや。長かったろうな。何という船に乗っているんだね？」

「知らない。そううまくターミナルでただ乗りできると思うかい？ 貨物船の発着場をあたってみる方がよさそうだな」

「なるほど、ただ乗りするつもりならね。だけど、アルフレッドがやってこなかったら、きみが彼の旅券を使っても多分かまわないだろうな。やっこさんはもう二隻も船に乗り損なっているからね。だいたい自分でもどうして彼を待ってここで立ち往生しているのかわからんよ。わたしたちがいっしょに行く計画を立てたということ以外には」

「月へかい？」

「その通り」

「そりゃあ、しめた」ジョーが顔を輝かせていった。「彼がこなければいいんだが——」

彼はいいよんだ。「これはシンプレックスな考え方だよね？」

「真実はいつでもマルチプレックスだよ」とオズカーがいった。

「そう。彼女もそうだった」

「昼間きみといった御婦人のことかね？」

ジョーは頷いた。

「ところで、彼女は誰なのかね？」

「サン・セヴェリナだよ」

「その名前は聞いたことがあるな。銀河系のこんな渦状肢で彼女は何をしているのかね？」

「ルルを少し買ったんだよ。彼女にはしなくちゃいけない仕事があったから」

「ルルを買ったって、ええ？ ところが彼女はきみに旅券代としてびた一文渡さなかったというのかね？ 月旅行料金の百五十クレジットぐらいはどうにでも融通できると誰しも思うのに」

「いや、彼女はとても気前のいい人だよ」とジョー。「それに彼女はルルを買ったんだから、彼女のことを悪くするのはいけないんだ。彼らを所有することは、とてもとても悲しいことなんだから」

「わたしがルルを買えるほどの金を持っていたとしても」とオズカー。「どうということはない、そう、何もわたしを悲しませはしない。ルルを少しだって？ いったい彼女は何匹買ったんだね？」

「七匹さ」

オズカーが額に手をあてて、ヒューと口笛を鳴らした。「しかもその値段は等比級数的に増加する！ 二匹買うには、一匹を買う四倍の金がかかるのは知ってるだろう。それでも彼女はびた一文くれなかったんだね？」

ジョーは再び頷いた。

「信じられん。そんな話は今まで聞いたことがない。彼女がどれほど途方もなく富裕でなければならぬか、きみにもわかるだろう？」

ジョーは首を横に振った。

「きみはあまり聡明ではないんだね？」

「おれがどれだけかかるのか訊かなかったから、彼女も教えなかったんだ。おれは彼女の船の単なる宇宙船ゴロだったんだからね」

「宇宙船ゴロ？ 刺激的な響きがあるね。わたしもきみぐらいの歳には、いつもそんなことをしてみたと思うっていたんだ。だが、度胸がなかったんだな」でっぷりと太った男は、突然落ち着かなげな表情を浮かべてターミナル内を見回した。「ああ、アルフレッドはやってきそうもないな。彼の旅券を使いなさい。受付に行つて要求すればいいだけだから」

「でもおれはアルフレッドの身分証明をするようなものは何も持っていないんだよ」とジョー。

「アルフレッドは身分証明書など持っていたためしがない。いつでも財布やそんな類たぐいのものを失くしてしまうんだよ。わたしが彼の予約をとつてやる時はいつでも、彼が何ら身分証明に相当するものを持っていないことを条件にしている。だから、きみはただアルフレッド・A・ダグラスだといえばいい。それで旅券はもらえるから。さあ、急いで」

「うん、わかった」彼は人々の間を通り抜けて、事務員のところに行つた。

「すみません」と彼はいった。「A・ダグラスの旅券はありますか？」

受付の事務員はひとわたり名簿に目を通した。「ええ。ちゃんと載ってますよ」ジョーに向かつてにやりと笑う。「地球では相当お楽しみなさつたようですね」

「はあ？」

「この旅券は三日もあなたを待っていたんですよ」

「ああ」とジョー。「いや、ちょっとごたごたがあつてね、それが治まるまで両親に会いたくなくなつたんだよ」

事務員は頷き、片眼をつぶってみせた。「これがあなたの旅券です」

「ありがとう」そういつて、ジョーはオスカーのところに戻つた。

「次の便はちょうど今乗船中だ」オスカーがいった。「さあ、行こう。やっこさんは別の方法で来るしかないだろうよ」

船上でジョーは尋ねた。「^{ラッシュ}でかぶつ^ツVがまだ月にいるか知ってる？」

「そう願いたいね。わたしの聞いたところでは、彼はどこにも行かないらしいし」

「見つけるのは難しいと思うかい？」

「そうは思わないね。それにしても窓の外は美しい眺めではないかね？」

月のターミナルから出た時も、オスカーはまた別の卑猥な話を事細かに喋っていた。頭上一マイルのところまで円弧を描いているプラスチックドームを、陽光が三日月形に明るく縁どっている。彼らの右手では月の山脈が大きく湾曲しており、背後には緑色のポーカーチップのような地球が天にかかっている。

突如、誰かが叫んだ。「あそこにいるぞー！」

女性が悲鳴をあげ、後じさりした。

「つかまえろ！」別の誰かが叫ぶ。

「いったいぜん……」オスカーがまくしたてようとした。

ジョーはあたりを見回し、習慣的に左手をあげた。だが鉤爪はない。連中は四人——一人は後ろ、一人は前、そして両横に一人ずつ。身をおとしたはずみに、オスカーにどんと突きあたる。するとオスカーはバラバラになってしまった。その破片が、彼の足の周りをぐるぐると回っている。

周りを見回すと、ほかの四人の男も爆発した。そのぶんぶんとうるさく飛び回る破片は、彼の周りを回って取り囲み、その包囲を狭め、他の下船者たちの当惑した顔をぼやかした。と、突然その全部が合体し、彼は恐ろしい暗黒の中に閉じ込められた。意気沮喪しかけた寸前、彼に一条

の光明が差し込んできた。

「ボシー！」誰かが甲高い声をあげた。「ボシー……！」

ジョーはひどく小さな部屋のバブル・チェアに降ろされた。その部屋は動いているように思えたが、はつきりそうとはいきれなかった。もとオスカーだった声があった。「エイプリル・フルだ。驚いたかね」

「くそっ！」ジョーは叫んで立ちあがった。「いったいどうなってんだ——どうなってるんだ？」

「エイプリル・フルだ」その声は繰り返していった。「わたしの誕生日でもある。きみは混乱しているようだ。でもすっかり度胆を抜かれたわけではないんだろ？」

「死ぬほどこわかったぞ。これはどういうことだ？ おまえは誰なんだ？」

「わたしはへでかぶつV」とへでかぶつVがいった。「きみは知ってると思ってたんだがな」

「何を知ってるって？」

「オスカーやアルフレッドやボシーなんかの役割をだよ(オスカー・ワイルドはアルフレッド・ダグラスと有。名な男色事件を起こした。ボシーはダグラスの愛称)」

ともに楽しんでくれているものと思っていた」

「何を楽しめっていうんだ？ おれはどこにいるんだ？」

「もちろん、月だよ。きみがここに来るのにそれが賢明な方法だと思ったんでね。サン・セヴェリナはきみの料金を払ってくれなかった。彼女はわたしがしてくれるだろうと考えたのだ。それ

で、わたしがその勘定をたてかえたんだから、少しは楽しませてもらわなければ割に合わない。

ぴんとこなかったかね？」

「何が来るって？」

「ただの言い回しだよ。よくやることなんだ」

「そうかい、次回は気をつけておくれよ。ところで、きみは何者なんだ？」

「どこにでも存在する言語マルチ・プレックスだ。きみにとっては^{ラッ}ハでかぶつ^ッだよ」

「一種のコンピュータなの？」

「うーむ。まあ、そんなところだな」

「それで、これからどうなるんだい？」

「きみはわたしに相談するだろう」と^{ラッ}ハでかぶつ^ッ。「そしてわたしが手助けをする」

「おお」とジョー。

バブル・チェアの後ろからくすくす笑いがして、ディクが姿を見せ、ジョーの前に坐ると、非難するように彼を見た。

「おれをどこへ連れて行ってるんだい？」

「わたしの中央コンソールへだ。そこで休養しながら計画を立てればよい。坐ってくつろいだらどうかね。三、四分もすれば着くから」

ジョーは坐り直したが、くつろげなかった。それで、オカリナを取り出し、前面の壁にドアが開くまで吹き続けた。

「さあさあ、到着だ、その日のうちに帰れるとはね」と^{ラッ}ハでかぶつ^ッがいった。「入ってくれな
いか？」

「おれは」——コンソールにケープを投げつける——「こうしちや」——ガラス壁に小物袋を投げつける——「いられないんだ！」最後はデイクへの飛び蹴り。だが、デイクが身をかわしたので、ジョーは危うく転びそうになった。

「誰がきみの邪魔をしているんだね？」^ラでかぶつ^ブが尋ねた。

「くそつ、きみじゃないか」ジョーが唸った。「なあ、おれはもうここに三週間もいるんだぜ。」

「くそつ、きみじゃないか」ジョーが唸った。「なあ、おれはもうここに三週間もいるんだぜ。きみは、おれが出て行くこうとするたびに、あのえんえん九時間もの馬鹿馬鹿しい話し合いをして、それですっかりおれをくたびれさせてしまうんだ」彼は広間を横切ってケープを拾いあげた。

「その通り、おれはまぬけだよ。でも、どうしてきみはそんなことを繰り返して楽しむんだ？」

おれは未開惑星出身のノープレックスなんだから、仕方がないこと——」

「きみはノープレックスじゃない」と^ラでかぶつ^ブ。「きみのもの見方はもう完全なコンプレ

ックスだ——古いシンプレックス観に対するわからなくもないノスタルジアを、まだたくさん抱えてはいるがね。時々きみはそれを議論にも持ち出そうとする。あの時、見かけ上の現在

(ある人にとっての現在が、他人にとっては過去の主観的現在。)の理解を阻んでいる心理要因をわれわれが議論していた時も、

きみが頑固に——」

「いや、ちがう、きみは間違ってる！」とジョー。「おれは別のものになるつもりなどないんだ」そのとき彼は広間の反対側に転がった小物袋を拾っていた。「おれは出て行く。デイク、行こうぜ」

「きみは」と普通より威厳をこめて^ラでかぶつ^ブがいった。「愚かになりつつある」

「そう、おれはシンプレックスだ。今でもそのままなのさ」

「知識とプレックスに相関関係はない」

「きみが四日間かけて動かし方を教えてくれた宇宙船もある」ジョーはガラス壁の向こうを指さしていった。「おれがここにきたその晩に、催眠記憶でおれの頭ん中に道筋も植えつけてくれている。いったいぜんたい何がおれを止めているというんだ？」

「何もきみを止めてはいない」と^ラでかぶつ^ブが答えた。「だから、そういう考えを念頭から追いつけば、きみは落ち着いてこのことをじっくりと考えられるのに」

腹をたてたジョーは、チェック・ランプやプログラム修正用キイボードが点滅する、六十フィ